

原子力発電に対する賛否と回答者特性との関係に関する研究

A Study on relationship between the pros and cons of nuclear power generation

and the respondent characteristics

*稲村 智昌¹, 桑垣 玲子¹, 山田 博幸¹

¹電中研

原子力発電所立地地域及び大都市圏の住民を対象として、原子力発電について入手している情報の内容や情報源の特徴、求めている情報の内容等を把握するために、インターネット調査を実施した。本報告では、原子力発電に対する賛否と確率・頻度の理解等との関係について分析した結果を紹介する。

キーワード：原子力発電に対する賛否、確率・頻度の理解、リスク認知、社会調査

1. インターネット調査の概要

調査会社に登録されている Web モニターを対象に、原子力発電所立地地域(女川、東海第二、柏崎刈羽、伊方、玄海、川内)の原則 50km 圏内の居住者及び関東・関西大都市圏の居住者の合計 8000 名について、年代及び性別で 100 名ずつ各地域に均等に割り付けて調査を実施した(5 年代×2 性別×8 地域)。調査期間は 2016 年 2 月 19 日から 2 月 29 日までであり、回答数合計は 9902 名(男性 5125 名、女性 4777 名)となった。

2. 調査結果の概要

原子力発電のリスク認知(「とても危険」(26.6%)、「危険」(20.3%)、「どちらかといえば危険」(22.9%)、「どちらともいえない」(23.4%)、「どちらかといえば安全」(4.6%)、「安全」(1.6%)、「とても安全」(0.6%))、原子力発電の仕組みに関する主観的知識量(「よく知っている」(9.0%)、「多少知っている」(56.9%)、「知らない」(34.1%))、原子力発電に対する賛否等についての回答を得た。また、広田(2012)[1]を参考に、簡単な確率計算の問題に解答してもらうことにより、数処理能力の把握を試みた。

2-1. 原子力発電に対する賛否

原子力発電に対する賛否について、賛成から反対までの 10 段階で質問した。本報告では、賛成寄りの 4 層を「賛成」(27.1%)、「どちらかという賛成」(21.0%)と「どちらかという反対」(16.3%)の 2 層を「中間」、反対寄りの 4 層を「反対」(35.5%)と定義する。

2-2. 原子力発電に対する賛否と事故リスクの頻度表現に対する理解との関係

原子力発電に対する賛否と、事故リスクの頻度表現(10^{-5} /年)に対する理解との関係を図に示す。全体的には、「可能性は低い、ゼロではない」という回答が最も多い。「中間」は、「どのくらいのリスクなのかかわからない」という回答が他よりも多い。「賛成」は、「今後 100000 年は、大事故は起きない」という回答が他よりも多く、「明日にでも大事故が発生する可能性が高い」という回答が他よりも少ない。「反対」は、「明日にでも大事故が発生する可能性が高い」という回答が他よりも多い。

2-3. 考察

同じ事故リスクの表現(10^{-5} /年)を聞いたときに、「明日にでも大事故が発生する可能性が高い」と理解する割合は、「賛成」より「反対」の方がかなり多い。しかし、数処理能力に関しては、「賛成」と「反対」との間に顕著な差は見られなかった。このことから、数処理能力は同程度であっても、同じ頻度表現(10^{-5} /年)については、「賛成」より「反対」の方が切迫していると捉える割合が多いと言える。また、「反対」の約半数が原子力発電を「とても危険」と認識している等の結果が得られており、原子力発電のリスク認知と賛否との間には相関がある。リスク認知の差が頻度表現に対する理解に影響するのか、頻度表現に対する理解の差がリスク認知の差につながるのか等については、今後のインターネット調査やグループインタビュー調査等でさらに検討したい。

「ある原子力発電所の事故のリスクを評価した結果、原子炉が損傷するような大事故が発生する頻度は 10^{-5} /年であった。」という結果を見た場合の、あなたのお考えにあてはまるものをひとつだけお選びください。

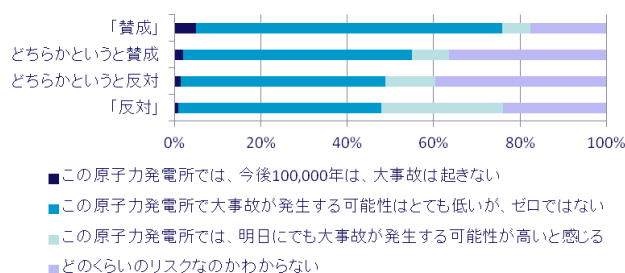


図 原子力発電に対する賛否と事故リスクの頻度表現に対する理解との関係

参考文献

[1] 広田, 「ニューメラシーによる意思決定バイアスの違い～インターネット実験での一般標本による検討～」, 日本心理学会第 75 回大会発表論文集, 2012.

¹Tomoaki INAMURA¹, Reiko KUWAGAKI¹ and Hiroyuki YAMADA¹

¹CRIEPI.